

植民地朝鮮における高木市之助年譜と著作一覧

〔凡例〕 この「植民地朝鮮における高木市之助年譜と著作一覧」は、日本文学研究者・高木市之助（1888年〈明治21〉2月5日-1974年〈昭和49〉12月20日）の植民地朝鮮における経歴・活動と著作をまとめたものである。高木は1926年から1939年までの13年間、植民地朝鮮に滞在した。この年譜と著作一覧には、その前後数年分も含めた。

- 高木の年齢は満年齢で数え、生まれの月日に関わらず、その年になった年齢で示した。
- 資料の引用文は高木に関する記事のみ挙げた（列挙されたその他の人々は原則として省略。但し、最初の視学委員就任時の記事などについては省略しなかった）。
- 資料の引用文中の旧字体は新字体に、異体字は正字体または常用漢字体に改めた。
- 資料の引用文中の数字は原文の漢数字のままとした。

この年譜と著作一覧を踏まえた小松靖彦の論考「植民地朝鮮における高木市之助」（『戦争と萬葉集』第5号、2023・2）も併読されたい（高木の研究・教育活動の時期区分もこの論文参照）。

【年譜】

〔全集〕 = 『高木市之助全集』第10巻（講談社、1977）所収「年譜」

〔官報〕 = 「朝鮮総督府官報」 〔京〕 = 「京城日報」 〔朝〕 = 「朝鮮新聞」

〔中山〕 = 中山和子「植民地末期の朝鮮文壇と日本語文学(一)」『文芸研究（明治大学）』第69号、1993・2

〔永島〕 = 永島広紀『戦時期朝鮮における「新体制」と京城帝国大学』ゆまに書房、2011

〔朝鮮史〕 = 武田幸男編『朝鮮史』新版 世界各国史、山川出版社、2000

〔趙景達〕 = 趙景達『植民地朝鮮と日本』岩波新書、岩波書店、2013

- 「〇月〇日付」は、〔官報〕〔京〕〔朝〕にその出来事の日付がない場合。なお、〔京〕〔朝〕のこの日付は欄外の日付による（〔京〕〔朝〕は前日の夕刊を、朝刊と一括し同じ号とする）。
- 「※」 = 関連する歴史的事項 ➤ 「❖」 = 未見 ➤ なお、資料中の下線は引用者

【著作一覧】

①植民地朝鮮に関する高木の著作（タイトル太字）

②植民地朝鮮で発行された印刷物に掲載された高木の著作（タイトル太字）

を挙げた。参考として、植民地朝鮮における高木の主な研究論文を薄い文字で挙げ、他は略。

〔大竹・布袋〕 = 大竹益夫、布袋敏博編『朝鮮文学関係日本語文献目録』緑蔭書房制作、1997

〔大竹聖美〕 = 大竹聖美『植民地朝鮮と児童文化』社会評論社、2008

〔ざっさくプラス〕 = 「雑誌記事索引集成データベース ざっさくプラス」（皓星社）

- 発行月日の未記入のものは、未確認
- 「※」 = 植民地朝鮮における高木を考える上で重要な著作
- () = 論文末尾に記された日付（元号は西暦に置き換えた）

☐ = 高木市之助『吉野の鮎』の各論文末尾に記された日付 ☐ = 『高木市之助全集』で確認した各論文末尾に記された日付

〈京城帝国大学教授就任以前の、関連する高木の著作〉〔全集著述目録に情報を追加〕

1912年（明治45）24歳

- ・6月 叙事詩として見たる平家物語❖ 卒業論文 全集未収録

1916年（大正5）28歳

- ・3月20日 民謡の心理的起源（1）❖（執筆者名「京町生」） 薄明 第2巻第1号 全集未収録
- ・6月5日 民謡の心理的起源（2）❖（執筆者名「京町生」） 薄明 第2巻第2号 全集未収録

（全集著述目録は発行月を5月と誤る）

1917年（大正6）29歳

- ・1月 一万葉詩人の太宰府生活❖ 薄明 全集未収録
- ・2月 民謡の心理的起源（3）❖ 薄明 全集未収録

1924年（大正13）36歳

- ・5月 他山録1 パウンドの「詩の起源」 国語と国文学 第1巻第1号 全集7
- ・8月 他山録2 「人形劇の主役」を読む（その1） 国語と国文学 第1巻第4号 全集7
- ・12月 他山録2 「人形劇の主役」を読む（その2） 国語と国文学 第1巻第8号 全集7

1925年（大正14）37歳

- ・10月 源氏物語の英訳 国語と国文学 全集7

《植民地朝鮮時代／文化政治期（1919～1934）》-----

1924年（大正13） 36歳

- ・10月13日 「 浦和高等学校教授従五位 高木市之助
任朝鮮総督府京城医学専門学校教授
叙高等官三等」〔官報 3655（1924・10・20）〕
- ・10月13日 「五級俸下賜 朝鮮総督府京城医学専門学校教授 高木市之助」
〔官報 3655（1924・10・20）〕
- ・10月20日 「 朝鮮総督府京城医学専門学校教授 高木市之助
文学研究法研究ノ為満一年四箇月間仏蘭西国、独逸国及亜米利加合衆
国へ在留ヲ命ス
但シ帰朝ノ途次印度へ立寄ルヘシ
学資金年額四千五百円ヲ給ス但シ亜米利加合衆国在留中八年額五千
五百円ヲ給ス」〔官報 3657（1924・10・22）〕
- ・10月22日 「十月二十二日日本国高木市之助ノ辞令中独逸国ノ下「英吉利国」ヲ脱ス
（「正誤」）〔官報 3662（1924・10・28）〕
- 10月 「朝鮮総督府京城医学専門学校教授となる。同月、文学研究法研究のためフランス、ドイツ、イギリス、アメリカ合衆国へ留学を命じられ、十一月、未赴任のまま洋行」〔全集〕

1925 年 (大正 14) 37 歳

- ・ 8 月 31 日 「朝鮮総督府京城医学専門学校／教授朝鮮総督府在外研究員 高木市之助
自今家族手当ヲ支給セス
朝鮮総督府京城医学専門学校／教授朝鮮総督府在外研究員 高木市之助
在外研究員規定第十二条第二項但書ニ依リ俸給年額二千十五円下賜」
〔官報 3938 (1925・10・2)〕
- ・ 9 月 30 日 「朝鮮総督府在外研究員 高木市之助
自今亜米利加合衆国在留中モ学資金年額四千五百円ヲ給ス」〔官報
3939 (1925・10・3)〕

1926 年 (昭和元) 38 歳

○ 3 月 「帰朝」〔全集〕

■ 第(1)期: 1926 年 4 月～1932 年 3 月

- ・ 4 月 1 日 「朝鮮総督府京城医学専門学校教授従五位 高木市之助
任京城帝国大学教授
叙高等三等官」〔官報 4086 (1926・4・6)〕
- ・ 4 月 1 日 「(書込)〈本俸〉七級俸下賜 京城帝国大学教授 高木市之助
法文学部勤務ヲ命ス
国語学、国文学講座担任ヲ命ス」〔官報 4086 (1926・4・6)〕
- ・ 4 月 1 日 「京城帝国大学教授朝鮮総督府在外研究員 高木市之助
在外研究員規定第十二条第二項ニ依リ俸給年額二千十五円ヲ給ス」
〔官報 4138 (1926・6・5)〕
- 4 月 「京城帝国大学教授となる」〔全集〕
- ・ (5 月 11 日) 「○朝鮮総督府在外研究員転任 朝鮮総督府在外研究員ヲ命セラレシ海
外派遣中ノ左記ノ者ハ大正十五年四月一日各頭書ノ現官ニ転任シタ
ルニ付引続キ朝鮮総督府在外研究員トシテ帰朝迄定員外ノ取扱ヲ為
ス
記
前 官 名 現 官 名 氏 名
朝鮮総督府京城医学専門学校教授 京城帝国大学教授 高木市之助」
〔官報 4116 (1926・5・11)〕
- ・ 7 月 21 日～28 日 「○夏季講習会聴講生募集
京城帝国大学法文学部夏季講習会要項
一 会 期 自七月二十一日至七月二十八日 八日間
二 会 場 京城帝国大学予科講堂 (京城府外清涼里)
三 講習科目及講師 (一科目八間時宛)

人文主義ノ發達 京城帝国大学教授 島本愛之助
 日本文学ノ特質 同 高木市之助
 代議制度ト選挙 京城帝国大学助教授 松岡修太郎
 景気ノ變動ト恐慌学説 同 四方 博

四 定員 約百八十名

但シ設備ノ都合上定員超過ノ場合ハ謝絶スルコトアルヘシ

五 聴講料 一科目ニ付一円

既納ノ聴講料ハ定員超過ノ場合ハ謝絶シタル場合ノ外之ヲ還付セス

六 申込 聴講希望者ハ其科目ヲ明記シ聴講料（現金又ハ為替）ヲ添ヘ七月十日迄ニ京城帝国大学法文学部ニ申込ムコト

七 其ノ他 修了者ニハ証明書ヲ付与ス

昭和二年六月

京城帝国大学」〔官報

129 (1927・6・6)、130 (1927・6・7)、131 (1927・6・8)〕

※3月9日 『平家物語』 ◆ [沼沢龍雄と共編] (中興館) 【軍記物】
 全集未収録 (発行月日は国立国会図書館デジタルコレクションに拠る。全集著述目録は2月とする)
 ※10月 軍記物の本質 国語と国文学 第3巻第10号 【軍記物】
 全集5

1927年 (昭和2) 39歳

- ・ 8月13日 「陞叙**高等官二等** 京城帝国大学教授従五位 高木市之助」
 [官報 193 (1927・8・19)]
- ・ 9月15日 「叙正五位 従五位 高木市之助」
 [官報 276 (1927・11・30)]
- ・ 10月19日 「 京城帝国大学教授 児島献吉郎
 京城帝国大学教授 島本愛之助
 京城帝国大学教授 藤塚 鄰
 京城帝国大学教授 高木市之助
 京城帝国大学教授 安倍 能成
 京城帝国大学教授 佐藤 清
 京城帝国大学予科教授 戒能 義重
 京城帝国大学予科教授 森 為三
 京城帝国大学予科教授 近藤 英三

視学委員ヲ囑託ス〔官報 243 (1927・10・20)〕

*視学委員＝

【「明治四十五年朝鮮総督府訓令第六十一号」(1912・5・20)の「視学規程」】

「第一条 視学官及視学ノ觀察スヘキ事項ノ概目ハ左ノ如シ

- 一 学校教育ノ状況
- 二 学校ト其ノ所在地トノ關係
- 三 国語普及ノ状況及其ノ施設
- 四 道及府、郡ノ教育行政ノ状況
- 五 学事關係職員ノ品行及勤務ノ状況
- 六 教育学芸ニ關する諸施設及書堂ノ状況
- 七 特ニ指命ヲ受ケタル事項及其ノ他必要ト認メタル事項

第二条 視学官及視学ノ視察上必要ト認ムルトキハ学校ノ日課ヲ変更シテ授業ヲ為サシメ若ハ生徒ノ学業ヲ試問スルコトヲ得

第三条 視学官及視学ハ学事視察ノ際左記事項ニ付キ關係者ニ対シ注意ヲ与フヘシ

- 一 法規ニ抵触シタル事項
- 二 府議ノ決定シタル事項
- 三 教授訓練ニ關スル事項

前項ノ注意中後日参考トナルヘキ事項ハ学校ノ記録ニ留メシメ視学官又ハ視学認印スヘシ

第四条 視学官及視学ハ視察上差支ナキトキハ可成關係道長官ニ視察ノ状況ヲ陳述スヘシ

視学官ハ前項ノ外学事ニ關スル施設ニ付キ意見ヲ陳述スルコトヲ得

第五条 視学官及視学本府ニ帰着シタルトキハ直ニ大要ヲ復命スヘシ但シ急ヲ要スル事項ハ出張先ヨリ要領ヲ申報スヘシ

第六条 命ヲ受ケ学事ヲ視察スル者ニ關シテハ第一条乃至第三条及第五条ノ規定ヲ準用ス〔官報 517 (1912・5・20)〕

【「朝鮮総督府訓令第二十九号」(1928・10・26)の「朝鮮総督府視学官及朝鮮総督府視学委員学事視察規定」】

「第一条 視学官学事視察ヲ命ゼラレタルトキハ左ノ事項ニ就キ視察スベシ

- 一 教育行政ノ状況
- 二 学校教育ノ状況
- 三 国語普及ノ状況及其ノ施設
- 四 学校衛生ノ状況
- 五 学校經濟ノ状況
- 六 学校ト其ノ所在地トノ關係

- 七 書堂及私設學術講習会ノ状況
- 八 社会教育其ノ他教育学芸ニ関スル諸施設ノ状況
- 九 学事関係職員執務ノ状況
- 十 特ニ指命ヲ承ケタル事項
- 十一 前各号ノ外必要ト認ムル事項

第二条 視学官視察上必要ト認ムルトキハ日課ヲ変更シテ授業ヲ為サシメ又ハ生徒児童ノ学力ヲ試験スルコトヲ得

第三条 視学官ハ学事視察ノ際左ノ事項ニ就キ関係者ニ対シ注意ヲ与フベシ

- 一 法規ニ抵触シタル事項
- 二 庁議ノ決定ニ反シタル事項
- 三 教授訓育ニ関スル事項
- 四 其ノ他特ニ指命ヲ承ケタル事項

前項ノ注意中後日参考トナルベキ事項ハ学校ノ記録ニ留メシメ視学官之ニ認印スベシ

第四条 視学官ハ視察上差支ナキトキハ成ルベク関係知事ニ視察ノ状況ヲ陳述スベシ

視学官ハ前項ノ外学事ニ関スル施設ニ就キ関係道知事ニ対シ意見ヲ陳述スルコトヲ得

第五条 視学官帰庁シタルトキハ遅滞ナク視察ノ大要ヲ復命スベシ但シ急ヲ要スル事項ハ出張先ヨリ其ノ要領ヲ申報スベシ

第六条 視学委員ハ朝鮮総督ノ命ヲ承ケ時ニ指命セラレルタル学事ヲ視察ス

視学委員視察ヲ終リタルトキハ一月以内ニ復命書ヲ提出スベシ

第七条 視学官及視学委員ニ非ザル者朝鮮総督ノ命ヲ承ケ学事ヲ視察スル場合ハ第一条乃至第三条及第五条ノ規定ヲ準用ス

(なお、「朝鮮総督府訓令第二十八号」〈1928・10・26〉が、「明治四十五年朝鮮総督府訓令第六十一号（視学規程）」を廃止）〔官報 550（1928・10・16）〕

※4月 軍記物の本質 国語と国文学 第4巻第4号 【軍記物】
全集5

・6月1日 あめりかの鴨緑江節 文教の朝鮮（京城・朝鮮総督府学務局内朝鮮教育会第22号）【歌謡】

全集10（『詩酒おぼえ書き』〈塙書房・1958・10〉の著者書き入れ本に拠る〈題「木曾節アメリカ版」〉。全集著述目録では題「アメリカの鴨緑江節」）

※8月15日 『萬葉集』◆〔久松潜一と共編〕（中興館） 【萬葉集】

1928年（昭和3） 40歳

・9月29日 「叙勲四等授瑞宝章 正五位 高木市之助」
〔官報 536（1928・10・9）〕

○10月 「朝鮮総督府視学委員となる（一九三二年三月まで）」〔全集〕

・12月22日付 **見出し**「来年の四月から／朝鮮女子大学／城大諸教授を中心に／設立の準備成る」〔京7570（夕刊〈題字下に「十二月廿一日」とある〉）〕

*高木は設立準備を進めた一人で、発起人の一人。

※10月 日本詩歌の母胎への一考察 国語と国文学 第5巻第10号 【歌謡】

(1928・8・31) **吉**

全集1〔『吉野の鮎』〈岩波書店、1974（復刊4刷）〉を底本として、著者書入れの初刷本〈岩波書店、1941・9〉（山崎敏夫蔵）を適宜参照した本文〕

1929年（昭和4） 41歳

・1月20日付 **見出し**『『萬葉時代』生る』〔京7596（朝刊）〕

*「京城大学内萬葉研究の一部学生と教授によつてはじめられたものである。萬葉の魅力（高木市之助氏）萬葉口歌鑑賞（森本治吉氏）市の植木（安藤喜一郎氏）萬葉集の朝鮮関係（石本清四郎氏）影をてさぐる（内藤吉之助氏）同人短歌等を掲載す表紙もよく充実味のある健全な編輯ぶりであつて、朝鮮にもこうした匂ひ高いよい雑誌の出るやうになつたのは誇るに足る切に健全な成長をいのる。（京城帝国大学法文学部内萬葉時代編集部五十銭）（全文）とある。

※11月3日 光州学生運動（～1930）〔趙景達 pp.120-121〕

・1月3日 **蛇文学** 朝鮮新聞 第9925号 9面 【〈文芸学〉的研究】

全集未収録（全集著述目録は題を「蛇と国文学」と誤る）

・1月 **萬葉の魅力** 萬葉時代（京城帝国大学法学部萬葉時代編集部） 創刊号 【萬葉集】

全集1〔『萬葉学論纂』〈明治書院、1931・3〉再録本文。発行元は東京大学図書館の書誌データに拠る）

・4月5日 **窓から見た朝鮮** 帝国大学新聞

全集著作目録未記載、全集未収録。（「音声学協会会報」第14号〈第3年 第4号、1929・5・31〉に見える。同資料は掲載書誌を「東京帝大新聞」とする）

・7月1日 **朝鮮の風景に就て** 真人（京城・真人社） 第7巻第7号（七周年記念特輯号） 【〈自然〉について】 （1929・5・25）

全集未収録（全集著述目録は題を「朝鮮の自然に就て」、発行月を5月と誤る）

1930年（昭和5） 42歳

・初夏 「満洲」を視察、山口喜一郎に元満鉄会社員・鹿子生儀『日本語教授法』を推薦（山口喜一郎『外国語としての我が国語教授法』、「巻頭言」のp.2、

山口喜一郎発行、・新高書店・大阪屋号書店大売捌、1933・3・5)。

- ・7月16日 「 京城帝国大学教授 高木市之助
昭和五年度**視学委員**ヲ命ス」〔官報 1062 (1930・7・18)〕

・2月16日 **劇と人形** 社団法人 京城放送局編輯『(JODK) ラヂオ大学講座論説集』
(社団法人 京城放送局) 【〈文芸学〉的研究】

全集未収録 (全集著述目録に見える。韓国国立中央図書館蔵)

・6月1日 **朝鮮語にしたしむ** 朝鮮教育新聞 第94号 6~7面 【朝鮮の「国語教育」】

全集未収録 (全集著述目録に見える)

・発行月日未確認 **小心火車** 京城雑筆 【「満洲」紀行】

全集 10 (『詩酒おぼえ書き』〈塙書房、1958・10〉の著者書き入れ本に拠る)

1931年 (昭和6) 43歳

- ・4月27日 「 京都帝国大学教授 高木市之助
昭和六年度**視学委員**ヲ命ス」〔官報 1292 (1931・4・30)〕

※6月17日 **宇垣一成、第6代総督就任**

*宇垣は「**内鮮融和**」を目標とする(『宇垣一成日記』昭和6年7月2日条)

*また、宇垣は教育政策として「国民精神の作興」による同化主義と日本語教育の普及を推進〔尹敬勲「日韓関係と教育政策—日本統治期の朝鮮総督府の教育政策の展開に関する歴史的考察—」東京大学大学院教育学研究科紀要』第47巻、2007〕

※9月18日 **満洲事変勃発(柳条湖事件)**

※赤色労働組合(赤労)運動が急進化し、1931~1935年に70件摘発、検挙者1759名〔趙景達 p. 159〕

※赤色農民組合(赤農)運動も1931~1935年に103件摘発、検挙者4121名〔趙景達 p. 160〕

- ・12月30日発行 朝鮮図書館研究会に入会(「朝鮮之図書館」〈京城・朝鮮図書館研究会〉第2号、1931・12・30)。

・1月10日 **民謡と文学(済州島の民謡から)** 朝鮮研究(京城・朝鮮研究所) 第4巻
第1号 【歌謡】

全集著述目録未記載、全集未収録。(〔大竹・布袋〕に見える)

- ・9月15日 **山家鳥虫歌と近世民謡の一面** 京城帝国大学法文学部編『日本文化叢考』
(京城法文学会第二部論纂、刀江書房)(奥付の「編輯者」は高木) 【歌謡】 (1931・7)

全集 8

1932年(昭和7) 44歳

※1月18日～3月3日 上海事変(5月5日停戦協定)

※3月1日 「満洲国」建国宣言

・3月8日付 **見出し**「城大／法文学部長に／高木教授／教授会で推挙さる」〔京 8730 (夕刊)〈題字下に「三月七日(月)」とある〉〕

*「目下日本文化叢考に近世の民謡を執筆中である。」とある。

・3月23日付 「今日の新聞」に「会報(第三号)高木市之助」〔京 8735(朝刊)〕

・3月31日 「補**京城帝国大学法文学部長** 高木市之助」
〔官報 1569(1932・4・2)〕

○3月 「**京城帝国大学法文学部長**となる(一九三三年三月まで)」〔全集〕

■第(2)期:1932年4月～1935年3月

・5月14日 「学芸だより」に「◇萬葉集書籍展観並萬葉講演会 久木社主催のもとに五月十四日(土)午後六時より府内南大門通総督府図書館に於て萬葉集書籍展観並に講演会を開催する由。講演者及び演題は次の通り
題未定／ 城大教授 高木市之助氏
萬葉集とすみれ／城大予科教授 名越那珂次郎氏
萬葉集挽歌／ 城大国文学研究室 渡部 保氏」〔京 8785(1932・5・13付朝刊)〕

・6月23日 「学芸だより」に「◇府立第一高女では来る二十三日より、城大高木市之助教授を講師に、三回に亘り国文学講演会を催す」〔京 8825(1932・6・22付朝刊)〕

・7月13日付 「今日の新聞」に「会報 第四号 高木市之助」〔京 8846(朝刊)〕

・7月28日付 **見出し**「真人社十周年／記念短歌大会」〔京 8861(朝刊)〕

*「真人社は過般龍鳳亭にて十周年記念短歌大会を開催したが出席者四十名の盛会にして当日は高木市之助氏浅川伯教氏の講演あり」とある。

・9月9日 「 正五位勲四等 高木市之助
叙勲三等授瑞宝章」〔官報 1709(1932・9・15)〕

・9月30日 「 京城帝国大学教授 高木市之助
朝鮮総督府平安北道知事 石川 登盛
陞叙高等官一等」〔官報 1724(1932・10・5)〕

・9月30日 「本府辞令(卅日附)」に、
「 京城帝国大学教授 高木市之助
本府平安北道知事 石川登盛
陞叙高等官一等」〔京 8927(1932・10・2付夕刊〈題字下に「十月一日(土)」とある〉)〕

- ・11月1日 「正五位勲三等 高木市之助
叙従四位」〔官報 1750 (1932・11・7)〕
- ※11月10日 **総督宇垣一成、国民精神作興についての「声明」を発表(朝鮮総督府編『施政二十五年史』pp.892-893)**
- ・11月13日 見出し「学生、実業団／卓球大会／◇十三日挙行」〔京 8966 (1932・11・11 付夕刊 (題字下に「十一月十日 (木)」とある))〕
*「大会役員」に「▲大会長神尾弉春▲委員長高木市之助」とある。
- ・11月26日付 見出し「新京城の触感／一東部編」〔京 8981 (朝刊)〕
*「京城帝国大学」の項目の「法文学部」の項目に、「^{げんほうぶんがくふてう}現法文学部長、^{せう}詳細に語れば五代目の^{たかぎ}高木市之助氏は^{こく}国文学の^{けうじゆ}教授、なにをめしあがるかは不明だが頗る色艶がよ^{ふめい}く、その^{てん}点では大学きつてのナンバーワン、^は歯切れがよくて講演がうまい、その上^{うへ}三味線が^{みせん}お上手、^{そへ}竹添町の^{あし}彼氏の^{あし}宅から^{あし}氏のひく^{あし}三味線の^{あし}リズムが^{あし}街にながれて^{あし}行人の^{あし}足をとめるのだ」とある。
- ・11月27日付 見出し「城大をめぐる／次に来るべき／古典文学コース／— (2) K記者一」〔京 8982 (朝刊)〕
*「^{ちか}近く^か歌謡の^{げんきゆう}研究を^{はつへう}発表される^{はず}筈の^{ふんがく}城大^{たかぎ}国文学教授^{すけし}高木市之助氏はこの^{てん}点に関して次のやうに言はれてゐる
現代文学と古典文学との関係は当然一致すべきもので古典文学研究
上現代文学を撰取する必要は大いにある。然し吾々の如く古典文学を
研究してゐる者である以上、その研究対象の関係上とかく従来の美学
に依拠した文学論殊に古典文学が吾々を支配するのは仕方のないこ
とである
といつて現代の^{げんだい}イデオロギツシユな^{がくろん}文学論を^{ぐわい}度外視することは^ふ不可能
である」とある。
- ※10月 **総督府、農村振興委員会設置**〔朝鮮史 (なお、振興運動開始は1933年3月とする)〕
- ※11月 **宇垣一成、農山漁村振興運動(農村振興運動)を開始(～1940年10月)**〔趙景達〕
*「この運動の先頭に立った宇垣一成は、社会主義運動の農村浸透に危機感を抱き、農民に「適度のパン」を与えることを朝鮮農政の重要な課題とした。」〔趙景達 pp.161-162〕

※1月 国文学と日本文芸学 国語と国文学 第9巻第1号 【〈文芸学〉的研究】
(1931・11・26) 全
全集7

※3月22日 短歌の社会性 『改訂版短歌講座』(改造社) 第2巻(概論作法篇) 【〈文学〉的研究】 (1932・1・27)

全集8(全集著述目録は発行月を5月に誤る)

※4月20日 『古代民謡史論』(岩波講座日本文学、岩波書店) 【歌謡】 (1932) 吉全集1(『吉野の鮎』(岩波書店、1974(復刊4刷))を底本として、著者書入れの初刷本(岩波書店、1941・9)(山崎敏夫蔵)を適宜参照した本文。発行日は国立国会図書館本に拠る。但し、修正した日付(原字不明))

・5月25日 萬葉集が持つ魅力(上) 京城日報 第8797号 8面 【萬葉集】

全集著述目録未記載、全集未収録。5月15日の図書館における久木主催講演会の概要を記者が筆記。(韓国国立中央図書館蔵)

・5月26日 萬葉集が持つ魅力(中) 京城日報 第8798号 6面 【萬葉集】

全集著述目録未記載、全集未収録。5月15日の図書館における久木主催講演会の概要を記者が筆記。(韓国国立中央図書館蔵)

・5月27日 萬葉集が持つ魅力(下) 京城日報 第8799号 8面 【萬葉集】

全集著述目録未記載、全集未収録。5月15日の図書館における久木主催講演会の概要を記者が筆記。(韓国国立中央図書館蔵)

※10月 今様は七五調に非ず 国語と国文学 第9巻第10号 【歌謡】

全集8

1933年(昭和8) 45歳

○1月 「次男令二出生」〔全集〕

※2月11日 緑旗同人会(もと「妙観同人会」、緑旗同人研究所(もと「妙観同人研究所」)維持会・共済部、全鮮緑化連盟、全鮮国体主義学生連盟が統合されて「緑旗連盟」となる〔永島 p. 26〕

・2月17日 朝鮮図書館研究会の臨時総会にて、評議員(京城在住)に指名される(「朝鮮之図書館」第3巻第1号(通巻第9号)、1933・4・5)

※2月 「国民精神作興」「心田開発」を行う団体を糾合して「京城教化団体連合会」が発足。緑旗連盟も、日本赤十字社朝鮮支部、愛国婦人会、帝国在郷軍人会、修養団、報徳会など58団体とともに加盟(「京城彙報」(京城府)138、44頁、1933・3)〔永島 p. 26, 53〕

・3月31日 「依願免京城帝国大学法文学部長 京城帝国大学教授 高木市之助」〔官報1867(1933・4・1)〕

※11月10日 総督府、国民精神作興の詔書十周年記念式典を挙行し、総督宇垣一成、「声明」を発表(朝鮮総督府編「施政二十年史」p. 874)

※1月15日 『近古文学と時代精神』(岩波講座日本文学、岩波書店) 【軍記物】 (1932・

11・31)

全集 5

・7月 **私を殺そうとした男** 京城雑筆

全集 9 (『詩酒おぼえ書き』〈塙書房、1958・10〉収録本文)

※8月 再び今様の形式に就て—藤田氏に答ふ 国語と国文学 【歌謡】

全集 8

・9月1日 **朝鮮に於ける国語教育** 教育 (岩波書店) 第1巻第6号 【朝鮮の「国語教育」】 (1933・8、木崎湖畔に於て)

全集著述目録未記載、全集未収録。 ([ざっさくプラス] に見える)

※9月15日 **萬葉集の表現美に就て** 『萬葉集講座』 (春陽堂) 第5巻 (萬葉美論) 【萬葉集/〈自然〉について】 (1933・9・4)

全集1 (『吉野の鮎』〈岩波書店、1974 (復刊4刷)〉を底本として、著者書入れの初刷本〈岩波書店、1941・9〉 (山崎敏夫蔵) を適宜参照した本文)

※10月7日 **日本文学研究法** 『日本文学講座』 (改造社) 第1巻 【〈文芸学〉的研究】

※12月10日 **叙事詩と上代文学** 『上代日本文学講座』 (春陽堂) 第2巻 【歌謡】 (1933・11・3)

全集1 (『吉野の鮎』〈岩波書店、1974 (復刊4刷)〉を底本として、著者書入れの初刷本〈岩波書店、1941・9〉 (山崎敏夫蔵) を適宜参照した本文〈題「日本文学における叙事詩時代」〉。全集著述目録は発行月を11月に誤る)

1934年 (昭和9) 46歳

・2月9日付 **見出し** 「龍山教化団/役員決まる」〔京 9412 (夕刊〈題字下に「二月四日 (水)」とある)〕

* 「来る十一日の紀元節に発会式をあげる **京城教化団体聯合会龍山教化区** では教化委員会 準備委員会を七日午後四時より三角地彰徳家庭女学校講堂で京城府庶務課長李源甫氏、本田龍山署長、龍山各町洞総代等多数出席の下に石原委員長の挨拶により開会、直ちに議事に入り、会則の制定、顧問役員の推薦を行ひ午後五時半盛会裡に閉会した、顧問並に役員左の如し

◇顧問 川島軍司令官、梅崎第二十師団長、大串朝鮮軍参謀長、**城大教授高木市之助氏**、京城日報社長時実秋穂氏、元京城地方院検事正長尾戒三氏

◇委員長 石原磯次郎氏副委員長本田龍山署長、同大野史郎氏 (全文) とある。

・3月31日 「補**京城帝国大学附属図書館長** 京城帝国大学教授 高木市之助

京城帝国大学附属図書館長職務俸給五百三十円下賜」〔官報 2166 (1934・4・2)〕

- 3月 「京城帝国大学附属図書館長となる（一九三五年五月まで）」〔全集〕
- ・10月21日付 「見出し」朝鮮神宮／奉讃歌／募集条件発表」〔京 9664 (夕刊〈題字下に「十月二十日（土）」とある〉)〕
- ※翌年秋の朝鮮神宮鎮座十年大祭の記念行事として奉讃歌（四句三節）を制定することとなり、募集。「なほ選者は文学博士上田萬年、同佐々木信綱、京城大学教授高木市之助三氏である」とある。

※2月 文学に於ける口誦性—特に軍記物に於ける口誦性に就て— 文学 第2卷第2号 【歌謡】 (1934・1・10)

全集6 (『古文芸の論』〈岩波書店、1952・5〉)の本文に拠る〈題「軍記—文芸の口誦性について」〉)

・6月1日 朝鮮名物を語る 朝鮮及満洲 (京城・朝鮮及満洲社) 第319号 【〈自然〉について】

全集10 (『詩酒おぼえ書き』〈塙書房、1958・10〉)の著者書き入れ本に拠る〈題「朝鮮名物」〉)

※8月 倭建命御葬歌に就て 文学 第2卷第8号 【歌謡】 (1934・6・30)

吉

全集1 (『吉野の鮎』〈岩波書店、1974 (復刊4刷)〉)を底本として、著者書入れの初刷本〈岩波書店、1941・9〉(山崎敏夫蔵)を適宜参照した本文〈題「古代歌謡における童謡の痕跡」〉)。

※9月 記紀時代人の生活—彼らの比喻をとおして— 短歌研究 第3卷第9号 【歌謡/〈自然〉について】 (1934・7・30) 全

全集1 (著者書き入れの「短歌研究」1934年9月号に拠る)

・12月 中年旅情 京城雑筆

全集10 (『詩酒おぼえ書き』〈塙書房、1958・10〉)の著者書き入れ本に拠る〈題「中年の旅情」〉)

《植民地朝鮮時代／「内鮮一体」を主張する戦時動員体制期(1935～1945)》-----

1935年 (昭和10) 47歳

※1月 総督宇垣一成の主導で「心田開発運動」が始まる

■第(3)期:1935年4月～1937年7月

- ・4月1日 「 京城帝国大学教授 高木市之助
昭和十年度視学委員ヲ命ス」〔官報 2464 (1935・4・2)〕
- 4月 「朝鮮総督府視学委員となる（一九三九年三月まで）」〔全集〕
- ・4月14日 「長男清之助死去」〔全集〕
- ・5月31日 「依願免京城帝国大学附属図書館長 京城帝国大学教授 高木市之助」

- [官報 2513 (1935・5・31)]
- ・6月17日 「京城帝国大学教授 高木市之助
京城帝国大学評議員ヲ命ス」[官報 2528 (1935・6・18)]
- この年 朝鮮神宮奉讚唱歌当選者発表（「朝鮮」（京城・朝鮮総督府）第 242 号 1935・7・1）。
- ※「選者文学博士上田萬年氏、同佐々木信綱氏及び城大教授高木市之助氏の三氏の慎重なる厳選によつて本日左の通りの発表があつた。」とある。

※3月10日 **戦記物と国語教育** 国語教育学会編『日本文学の本質と国語教育』（国語教育学会叢書第1輯）（岩波書店） 【軍記物】

全集5

※4月1日 **民族文学としての記紀歌謡** 文学 第3巻第4号（特輯「原始文学号」）
 【歌謡】 (1935・3・11)

全集1（『吉野の鮎』〈岩波書店、1974（復刊4刷）〉を底本として、著者書入れの初刷本〈岩波書店、1941・9〉（山崎敏夫蔵）を適宜参照した本文）

・8月1日 **妙香山水** 朝鮮（京城・朝鮮総督府） 第243号（随筆山水号） 【〈自然〉について】

全集10（『詩酒おぼえ書き』〈塙書房、1958・10〉の著者書き入れ本に拠る）

※12月25日 『萬葉集総釈 第八』（楽浪書院） 【萬葉集】

全集1（解説「卷第十六概説」のみを収録〈題「万葉集卷第十六概説」〉）

※12月25日 **古事記歌謡に於ける仮名の通用に就ての一試論** 京城帝国大学文学会編『京城帝国大学文学会論纂』第二輯「日本文学研究」（大阪屋号書店） 【歌謡】 (1935・11・3) 吉

全集1（『吉野の鮎』〈岩波書店、1974（復刊4刷）〉を底本として、著者書入れの初刷本〈岩波書店、1941・9〉（山崎敏夫蔵）を適宜参照した本文。全集著述目録の題「古事記歌謡に於ける仮名の通用についての一試論」。発行年月日、発行元は、桜井義之文庫（東京経済大学）本で確認）

1936年（昭和11） 48歳

- ※1月 「**緑人**」「**緑旗の下に**」「**学生緑旗**」を統合する形で、**緑旗連盟が「緑旗」を創刊**
 [永島 27頁]
- ・5月26日 「京城帝国大学教授 高木市之助
 昭和十一年度視学委員ヲ命ス」[官報 2809 (1936・5・27)]
- ※8月5日 **南次郎、第7代総督就任。**
- ※12月25日 **共産主義運動を主導した李戴裕逮捕。京城帝国大学法文学部教授三宅鹿之**

助は、1934年4月から自身が逮捕される5月まで、李戴裕を大学官舎に匿う

※1月1日 萬葉集防人歌の鑑賞 短歌研究(改造社) 第5巻1号(特輯・歴代名歌鑑賞) 【萬葉集】 (1935・11・30)

全集1(『吉野の鮎』〈岩波書店、1974(復刊4刷)〉を底本として、著者書入れの初刷本〈岩波書店、1941・9〉(山崎敏夫蔵)を適宜参照した本文〈題「萬葉集防人歌一首」〉。『吉野の鮎』収録のさい、大幅に加筆訂正が施された(全集1解題)

※1月 記紀歌謡の感動 文学 第4巻第1号 【歌謡】 (1935・11・30)

全集1(『吉野の鮎』〈岩波書店、1974(復刊4刷)〉を底本として、著者書入れの初刷本〈岩波書店、1941・9〉(山崎敏夫蔵)を適宜参照した本文〈題「感—記紀歌謡の古典的性格として—」〉。「初出文中の「感動」を「感」とするなど、単行本収録のさい大幅に補訂された(全集1解題)

・6月 訓話 私の靈葉❖ 木馬(京城・朝鮮児童協会) 第3号

全集未収録(全集著述目録、〔大竹聖美〕に見える)

・9月 高木市之助編「清香録」❖ 私家版

*高木市之助の長男・清之助の追悼書。麻生磯次、父〔高木市之助〕、佐藤徳三郎、水田宏、原仙作、水谷信夫、須藤宣子、ちよ〔清之助の妹〕が執筆。

全集未収録(全集著述目録に見える)(韓国国立中央図書館蔵)

※9月1日 齊明紀童謡の用字に就て 国語国文 第6巻第9号 【歌謡】 (1936・7・30 朝鮮金剛山麓に於て) 吉

全集1

※9月 萬葉集卷一 81~84 短歌研究 第5巻第9号 【萬葉集】

全集未収録(全集著述目録に見える)

・10月30日 朝鮮の国語教育について 『京城帝国大学創立十周年記念論文集 文学篇』(京城帝国大学文学会論纂第六輯、大阪屋号書店) 【朝鮮の「国語教育」】 (1936・5・18)

全集未収録(全集著述目録に見える)

※11月 景 文学 第4巻第11号 【〈自然〉について】 (1936・10・20) 全

全集7

※11月14日 記紀歌謡の比較に就て 藤村博士功績記念会編『国文学と日本精神』(至文堂) 【歌謡】 (1936・春) 吉

全集1(『吉野の鮎』〈岩波書店、1974(復刊4刷)〉を底本として、著者書入れの初刷本〈岩波書店、1941・9〉(山崎敏夫蔵)を適宜参照した本文)

1937年(昭和12) 49歳

※4月 総督南次郎、「国体明徴」「鮮満一如」「教学振作」「農工併進」「庶政刷新」の

五大政綱を發表

- ・5月 「朝鮮文芸協会」発足（日本人17名、朝鮮人、梁柱東、崔南善ら14名が参加）。座長に就任。「朝鮮文芸会」は時局歌謡発表会を主催し、時局歌謡の製造と伝播に協力。〔中山〕
- ・6月8日 「六月八日/JODK/JBAK/JBBK/JBCK/放送番組」の「第一放送」の項目に「[*午後]二時三十分(城)婦人講座(清津は休止)女流文芸(和歌)の鑑賞(一)テキスト/京城帝国大学教授/高木市之助」〔朝12957(1937・6・8付朝刊)〕
- ・6月15日 「同[*京城帝国大学教授] 高木市之助 昭和十二年度視学委員ヲ命ス」〔官報3124(1937・6・6)〕
- ・6月22日 「六月廿二日/JODK/JBAK/JBBK/JBCK/放送番組」の「第一放送」の項目に「[*午後]二時三十分(城)婦人講座、女流文芸(和歌)の鑑賞(終)テキスト 京城帝国大学教授/高木市之助」〔朝12971(1937・6・22付朝刊)〕

■第(4)期:1938年7月~1939年12月

※7月7日 盧溝橋事件、日中戦争始まる

- ・9月8日付 「新刊紹介」に「△緑旗(九月号)婦人特輯号として編まれてゐる、今号から佐藤九二男氏筆の表紙画が変つた、あつさりした美しいものである高木市之助氏の「防人の妻の歌鑑賞」その他内容豊富読み応へのある雑誌である(一部廿五銭京城初音町二〇〇其聯盟)」〔朝13049(朝刊)〕

※10月13日~19日「国民総動員週間」。ラジオ特別編成番組「国民朝礼ノ時間」のための新曲として、信時潔「海ゆかば」を作曲

- ・11月15日 「叙正四位 従四位勲三等 高木市之助」〔官報3259(1937・11・25)〕

※1月5日 『軍記』(岩波講座国語教育 第4回配本3、岩波書店) 【軍記物】

全集5

※4月 芳賀博士の学風 国語と国文学 【〈文芸学〉的研究】 (1937・1・31)

全

全集7

・5月1日 懸賞募集「教育者の歌」選後の感想 文教の朝鮮(京城・朝鮮総督府学務局内朝鮮教育会) 第141号

全集著述目録未記載、全集未収録

※7月1日 国文学に於ける次の段階 文芸復興 第1巻・第2巻 【〈文芸学〉的研究】 (1937・5・24)

全集未収録（全集著述目録に見える）

・9月1日 **防人の妻の歌鑑賞** 緑旗（京城・緑旗聯盟） 第2巻第9号（婦人特輯号）

【萬葉集】

全集1（『吉野の鮎』〈岩波書店、1974（復刊4刷）〉を底本として、著者書入れの初刷本〈岩波書店、1941・9〉（山崎敏夫蔵）を適宜参照した本文）

※9月10日 『国文学の文芸学的研究法』（岩波講座国語教育 第12回配本2、岩波書店）

【〈文芸学〉的研究】（1937・9）全

全集6（全集著述目録では題「国文学の文芸学的研究法」）

1938年（昭和13） 50歳

・2月16日 「ラヂオ／二月十六日（水曜）」の「あすのききもの／二月十七日」の項目の「第一放送」の項目に「[*午後]七時四十分（城）講演「明治天皇御製謹話」 高木市之助」〔朝13208（1938・2・16付朝刊）〕

・2月17日 「ラヂオ／二月十七日（木曜）」の「第一放送」の項目に「[*午後]七時二十分（城）講演 明治天皇／御製謹話 京城帝国大学教授／ 高木市之助」〔朝13209（1938・2・17付朝刊）〕

・2月17日 「今晚の放送」に「△七、四〇講演「明治天皇御製謹話」高木市之助（城）」〔朝13210（1938・2・18付夕刊〈題字下に「十七日夕刊（木）」とある〉）〕

※3月3日 朝鮮教育令改正（第三次）

*「南次郎は「**国体明徴**」「**内鮮一体**」「**忍苦鍛錬**」を三大教育方針とし、生徒の皇国臣民化を推進すべく、一九三八年三月三日、朝鮮教育令を改正した（第三次）。この改正によって、日本と同様に朝鮮にも小学校令、中学校令、高等女学校令が施行された。従来の普通学校、高等普通学校、女子普通学校は、それぞれ小学校、中学校、高等女学校となり、「国語」常用に関わりなく朝鮮人と日本人は共学となった。教科書も、すべて同一のものとなった。そして、朝鮮語は正課からなくなり、随意科目となった。公立学校では大半が朝鮮語を教授しなくなった。小学校などでは、日本語が下手な朝鮮人教師が、日本語がよくできる生徒に日本語を授業するというような滑稽な事態があちこちで見られるようになった。」「〔趙景達 p.187〕

・5月21日 「 京城帝国大学教授 高木市之助
昭和十三年度**視学委員**ヲ命ス」〔官報3402（1938・5・23）〕

・7月10日付 見出し「新萬葉集／第四巻を讀みて」（日高一雄）〔朝13352（朝刊）〕

*以下の3首の歌を挙げる。

「 高木市之助（七五頁）

朝鮮の移り住みて

○温突のけむりは低し冬籠るこれの親子の家をめぐりて

京城郊外

○うそ寒く風の籠らふ城門に民夏瘦せてうつ伏し憩ふ

江原道の高原地帯を旅す

○冬晴れて黎立ち枯るる原の窪に朝鮮の民部落せる見ゆ

・7月23日 「ラヂオ／七月廿三日（土曜日）」の「第一放送」の項目に「[＊午後] 三時（城）婦人講座 清涼歌抄（一）「叙景の歌兩三首」／ 京城帝国大学教授 高木市之助」〔朝 13365（1938・7・23付朝刊）〕

・7月23日～25日 **見出し**「忠南道教育会」〔朝 13369（1933・7・27付朝刊）〕

＊「【公州】忠南道教育会にては今夏の休暇を利用し道内中、初等学校教員を主体として新教育令の趣旨に則り実践的、又は学向的、新令によらしめ教育者の頭脳の改造を計り實際上真に皇国臣民の育成忠良有為なる国民の養成に当らしむべく去る二十三日より向ふ三日間公州本町小学校講堂において京城帝国大学教授藤塚鄰氏は今年一月長くも宮中御前において御進講の重任を果たされたる、漢文界の碩学で又、同校教授高木市之助氏は国語国文学界における大家にして視学委員の重責を荷はれつゝある方等を講師として招聘し夏期大学を開催されたが、本道より鄭知事、渡辺学務課長、野田、赤尾両視学を始めとして聴講三百八十八名の上り盛会と極めたが演題は左の通りであつた（写真は会場）

- 一、道德文化史上より観たる内鮮関係 藤塚 鄰
 - 二、明治天皇の御製 高木市之助
 - 三、手工料の本質と教授要目 信広 恐一
- （全文）とある。

・8月27日付 **見出し**「「小学唱歌」歌詞／審査を開始」〔朝 13399（朝刊）〕

＊「総督府学務局では小学校児童の「吾等の唱歌」と言つた気分の感懐の一致を狙つて去る六月下旬 新編纂唱歌教科書「小学唱歌」の歌詞右審査会を開くはずである

▲審査員 城大教授 高木市之助氏、同助教授田中梅吉氏、京畿高女校長高本千鷹氏総督府視学官岩村俊雄氏、総督府編輯課長岩下雄三氏、総督府編輯官森田梧郎氏、元町尋常小学校校長土生米作氏、南大門小学校訓導佐藤道義氏、総督府編輯書記広瀬続氏」（全文）とある。

※1月	文学に於ける文字の役割	国語と国文学	第5巻第1号	【萬葉集】
	(1937・11・20)	全		
	全集6（『古文芸の論』〈岩波書店、1952・5〉の本文に拠る〈題「文芸と文字」〉）			
※1月	変字法に就いて	垣内先生還暦記念会編	『日本文学論攷』（文学社）	【歌

謡】 (1937・11・16) 吉

全集1 (『吉野の鮎』〈岩波書店、1974 (復刊4刷)〉を底本として、著者書入れの初刷本〈岩波書店、1941・9〉(山崎敏夫蔵)を適宜参照した本文〈題「変え字法について」〉。全集著述目録では題「変字法に就て」)

・3月1日 **随筆 喜劇にをのく** 朝鮮の教育研究 (京城・京城師範附属学校内朝鮮初等教育研究会) 第113号 【朝鮮の「国語教育」】

全集未収録 (全集著述目録に見える)

※3月 日本文学に於ける用字の意義 特に記紀歌謡に就て 『日本諸学振興委員会研究報告』 第3篇 (国語国文学) (教学局) 【歌謡】

全集未収録 (全集著述目録は印刷月を9月に、書名を「日本諸学振興委員会報告」に誤る。奥書には「昭和十三年三月印刷」とある)

・4月 **チャップリン以前** 朝鮮雑筆

全集10 (『詩酒おぼえ書き』〈埜書房、1958・10〉の著者書き入れ本に拠る。全集著述目録では題「チャップリン以前」)

・4月10日 **明治天皇御製謹話** 社団法人 朝鮮放送協会編『ラヂオ講演講座』第2輯 (社団法人 朝鮮放送協会) 【天皇】

*末尾に「(二月十七日 DK より放送)」と記す。

全集未収録 (全集著述目録に見える。韓国国立中央図書館蔵)

※7月 軍記文学の一つの意義 科学ペン 第3巻第7号 【軍記物】

全集5

※8月1日 日本文学への関心と理解 (アンケート) 学芸 (「唯物論研究」改題) 第70号 (日本文学の過去と将来) 【〈文芸学〉的研究】

全集目録未記載、全集未収録

※10月 萬葉集に於ける清なるもの 文学 第6巻第10号 【萬葉集/〈自然〉について】 (1938・9・10) 吉

全集1 (『吉野の鮎』〈岩波書店、1974 (復刊4刷)〉を底本として、著者書入れの初刷本〈岩波書店、1941・9〉(山崎敏夫蔵)を適宜参照した本文〈題「万葉集における清なるもの」〉)

・10月1日 **文藝道と臣道** 緑旗 (京城・緑旗聯盟) 第3巻第10号 【〈文芸学〉的研究/天皇】

*「今夏金剛山で思ふがまゝに述べた事を速記して頂いたノートと私自身の記憶とにすがつてもう一度書き直して見たのである。随分ちがったものになつたが併し話の重点だけはそのまま再現した積りである。」(末尾の注記)

全集未収録 (全集著述目録に見える)

※11月 **象山際考** 読書 【萬葉集/〈自然〉について】 (1938・9・23) 吉

全集1 (『吉野の鮎』〈岩波書店、1974 (復刊4刷)〉を底本として、著者書入れの初刷本〈岩波書店、1941・9〉(山崎敏夫蔵)を適宜参照した本文)

※12月11日 『日本文学の環境』（日本文学大系第5巻、河出書房） 【自然】
全集7（全集著述目録は発行月を8月に誤る）

◎10月1日 森田梧郎 海ゆかばの歌について 朝鮮の教育研究 第121号

1939年（昭和14） 51歳

・2月8日 **見出し**「精神発揚週間の／豪華放送プロ／DKが銃後の大車輪」〔朝
13561（1939・2・8付）朝刊〕

*「来る十一日の紀元の佳節を中心として八日より全鮮一斉に**日本精神発揚週間**が実施されることになったが朝鮮放送協会ではこの週間に沿ひ国民精神総動員聯盟並に総督府関係当局と慎重詮衡の結果週間中左の通りの講演放送を行ふことになった

なほ紀元節当日には午後二時五分より朝鮮神宮広場において国民精神朝鮮聯盟、京畿道聯盟、京城聯盟共同主催の奉祝式実況を中継することになったが式中の聯盟総裁川島大將、南総督の告示は午後二時二十分より全鮮各地式場において京城より中継放送をキャッチし参列員一同に聴取させる筈である。

△七日午後七時三十分（十分間）

日本精神発揚週間実施に当りて

総督府学務課長

八木 信雄

△八日午後六時二十五分（三十分間）古文学に拠つて神武天皇を仰ぎ奉る

京城帝国大学教授

高木市之助

△九日午後七時四十分（二十分間）（各局ローカル道聯盟総裁講演）時難克服と日本精神

京畿道連盟総裁

甘藷 義邦

△十日午後六時二十五分（三十分間）能久古曾神国へ

朝鮮神宮 司

阿知和安彦

△十一日午後六時二十五分（未定）国民精神総動員朝鮮聯盟総裁

川島 義之

△十二日午後七時三十分（二十分）演題未定

朝鮮軍報道部長陸軍少將

勝尾 信義

△十三日午後七時四十分（二十分）演題未定

博文寺住職

上野 舜穎

△十四日午後六時二十五分（三十分）日本精神と家庭生活

(全文) とある。

- ・2月8日 「今晚の放送」に「△六、二五講演「古文学に拠つて神武天皇を仰ぎ奉る」高木市之助(城)〔朝 13562 (1939・2・9 付夕刊〈題字下に「八日夕刊(水)」とある)〕
- ・2月8日 「京城府の日本精神発揚週間」の項目の「二」の「ニ、ラジオ方向講演」に「1、二月八日午後六時二十五分／講演者 京城帝国大学教授 高木市之助／演題 「古文学に拠つて神武天皇を仰ぎ奉る」とある(「京城彙報」第207号、1939・2)。
- ・4月1日 「任九州帝国大学教授 京城帝国大学教授正四位勲三等 高木市之助 叙高等官一等」
〔官報 3663 (1939・4・8)〕
- ・4月2日 「人事」に「▲高木市之助氏(城大教授より九大教授に栄転)二日午后二時十分京城発赴任の筈」〔朝 13640 (1939・4・2 付夕刊〈題字下に「一日夕刊(土)」とある)〕
- 4月 「九州帝国大学教授となる」〔全集〕
- ※9月1日 **ドイツ、ポーランドに侵攻。3日にイギリス、フランスは、ドイツに対して宣戦布告。第二次世界大戦勃発。**

※2月 二つの生 解釈と鑑賞 第4巻第2号 【萬葉集】 (1939・1) 吉
全集1(『吉野の鮎』〈岩波書店、1974(復刊4刷)〉を底本として、著者書入れの初刷本〈岩波書店、1941・9〉(山崎敏夫蔵)を適宜参照した本文)

・3月20日 **古文学に拠つて神武天皇を仰ぎ奉る** 社団法人 朝鮮放送協会編輯『ラジオ講演講座』第12輯 【歌謡/天皇】
*末尾に「(二月八日 DK より放送)」と記す。
全集未収録(全集著述目録は題を「御製を通じて神武天皇を仰ぎ奉る」と誤る。韓国国立中央図書館蔵)

※4月15日 記紀から萬葉へ 国語国文 第9巻第4号(和歌研究特輯) 【歌謡/萬葉集/〈自然〉について】 (1939・3・10) 吉
全集1(『吉野の鮎』〈岩波書店、1974(復刊4刷)〉を底本として、著者書入れの初刷本〈岩波書店、1941・9〉(山崎敏夫蔵)を適宜参照した本文)

・4月 緑旗聯盟編『日本国民訓』(第4版) ❖ 緑旗聯盟 ?
*編集に関わったか。高木の論文「しこの御楯」に「随つて日本国民訓にも姑く本字を採つて置いたのであるが」とある。(本書第4版を奈良県立図書情報館が所蔵)

※10月 国学と国文学 国語と国文学 第16巻第10号 【〈文芸学〉的研究】

(1939・9・1) 全

全集 7

1940年(昭和15) 52歳

■第(5)期:1940年1月~1945年8月

・1月1日 森田梧郎「外地国語教育者として」(「コトバ」(国語文化研究所)第2巻第1号、1940・1・1)が、「恩師高木市之助教授」の論文「朝鮮の国語教育について」を紹介。

・1月12日~15日 見出し「国語講習会」〔朝 13893 (1940・1・11 付夕刊〈題字下に「十日夕刊(水)」とある)〕

*「朝鮮教育会、京畿道共同主催の下に来る十二日より十五日まで毎日午後零時半より四時までの間京城中学校講堂において「小学国語読本」上級用教授者のため国語の講習会を開催することになったが講師は九州帝国大学教授高木市之助氏である」(全文)とある。

○7月 「九州帝国大学法文学部長となる(一九四二年七月まで)。以後福岡県中等教育振興会視学委員、日本諸学振興委員会委員等を歴任」〔全集〕

※11月10日 紀元二千六百年祝典

・1月1日 日本国民訓解説「海行かば」の解 緑旗(京城・緑旗聯盟) 第5巻第1号 【萬葉集/天皇】 (1939・12・2)

*「朝鮮総督府調査月報」(第11巻第5号、1940・5・25)の「新刊図書雑誌(昭和十五年四月中)」の「雑誌重要記事目録(四月中)(文書課)」の「人口・雑」の分類項目中に挙げられている。

全集1(『吉野の鮎』(岩波書店、1974(復刊4刷))を底本として、著者書入れの初刷本(岩波書店、1941・9)(山崎敏夫蔵)を適宜参照した本文(題「海ゆかば」)

※2月 倭建命と浪漫精神 九大文学 【歌謡/天皇】 (1939・10・25) 吉

全集1(『吉野の鮎』(岩波書店、1974(復刊4刷))を底本として、著者書入れの初刷本(岩波書店、1941・9)(山崎敏夫蔵)を適宜参照した本文)

・7月1日 古典の世界 文教の朝鮮(京城・朝鮮総督府学務局内朝鮮教育会) 第179号 【朝鮮の「国語教育」】 (1940・6・17)

全集未収録(全集著述目録に見える)

※7月 吉野の鮎 文学研究(九州大学) 第27輯 【歌謡/萬葉集/天皇】 (1940・5・7) 吉

全集1(『吉野の鮎』(岩波書店、1974(復刊4刷))を底本として、著者書入れの初刷本(岩波書店、1941・9)(山崎敏夫蔵)を適宜参照した本文)

※7月30日 国文学を通じて見たる日本精神の特質 熊本県立熊本図書館編輯『第一

回図書館講習会講演集』(熊本県立熊本図書館) 【〈文芸学〉的研究/天皇】
 全集未収録(発行年月日は国立国会図書館デジタルコレクションに拠る。全集著述目録は掲載書誌を「熊本図書館報」、発行月を3月とする)
 ※8月 日本文学の理會とその技術について 近藤忠義編『日本文学入門』(日本評論社) 【日本文芸学】 (1940・3・15) 全
 全集7
 ※8月 文学 河合栄治郎編『学生と日本』(日本評論社) 【〈文芸学〉的研究】
 (1940・4・15)
 全集未収録(発行月はCinii Researchに拠る。全集著述目録は4月とする)

1941年(昭和16) 53歳

・10月24日、25日 熊本県図書館協会「秋季協議会」(24日)と「文化講演会」(25日)に参加(「図書館雑誌」(日本図書館協会)第35巻第11号(第264号)、1941・11・15)

*「文化講演会」

熊本県図書館協会・熊本県／文化協会八代支部共同開催／於八代市代陽国民学校講堂／十月廿五日午後一時半開会
 一、読書と人生 加藤[*宗厚]講師
 一、日本文化に於ける指導精神 高木[*市之助]講師
 [中略]高木は日本文化に於ける指導精神に就き其の蘊蓄を語られ、午後四時聴衆の感激裡に閉会した。聴衆は会員、市当局、国民学校、中学、女学、商業学校の上級生及び市各層の有識者ら一千五百余名に上った。／(熊本県図書館協会寄)」とある(「図書館時事」の項)。

※12月8日 太平洋戦争開戦

※6月1日 日本文学史と海洋意識 解釈と鑑賞 第6巻第6号(特輯・海洋文学) 【〈自然〉について】 (1941・4・20) 全 (*初出は執筆年次不記載)
 全集6(『古文芸の論』〈岩波書店、1952・5〉の本文に拠る〈題「三つの海」〉)
 ※9月26日 『吉野の鮎 記紀萬葉雜攷』(岩波書店) 【歌謡/萬葉集/〈自然〉について/天皇】
 全集1(『吉野の鮎』〈岩波書店、1974(復刊4刷)〉を底本として、著者書入れの初刷本〈岩波書店、1941・9〉(山崎敏夫蔵)を適宜参照した本文)
 ※12月 国見攷 文学研究(九州大学) 第30輯 【歌謡/萬葉集/〈自然〉について】 (1941・11・4) 全
 全集1

1942年(昭和17) 54歳

- ・5月21日付 見出し「九大法文学部長更迭」〔朝日新聞夕刊〕〔*「更迭」は交代の意〕
*「九大法文学部長高木市之助教授は十九日附で法文学部長を辞任し後任には佐久間鼎教授が即日就任した」(全文)とある。

※1月1日 歌垣の歌の論 国語と国文学 第19巻第1号 【歌謡/天皇】 (1941・11・25)

全集6(『古文芸の論』〈岩波書店、1952・5〉の本文に拠る〈題「歌垣一闘」〉)

- ・3月1日 しこの御楯 緑旗(京城・緑旗聯盟) 第7巻第3号(シンガポール陥落せり 特輯・国語常用の理念/婦人ときもの問題) 【萬葉集/天皇】 (1942・1・2)

全集未収録

※4月1日 防人の歌一首 文芸世紀(編輯人・中河與一) 第4巻第4号 【萬葉集/天皇】 (1942・2・23)

全集未収録

※8月1日 防人歌と国家的精神 文学 第10巻第8号(特輯「防人の歌」) 【萬葉集/天皇】 (1942・7・3)

全集1(『吉野の鮎』〈岩波書店、1974(復刊4刷)〉を底本として、著者書入れの初刷本〈岩波書店、1941・9〉(山崎敏夫蔵)を適宜参照した本文〈題「海ゆかば」〉)

※9月 国語や国字を議するには◆ 西日本新聞

全集未収録(全集著述目録に見える)

※9月 なのりその花 文芸春秋 【萬葉集/〈自然〉について】

全集10(『詩酒おぼえ書き』〈塙書房、1958・10〉の著者書き入れ本に拠る)

※10月 大東亜の新指標◆ 朝日新聞

全集未収録(全集著述目録に見える)

※11月 愛国百人一首略解◆ 西日本新聞(連載) 【天皇】

全集未収録(全集著述目録に見える)

※12月 愛国百人一首余談◆ 【天皇】

全集未収録(全集著述目録に見える)

◎11月1日 徐斗銖^{ソドウス} 防人のこゝろ 名作研究 国民文学 第2巻第9号

1943年(昭和18) 55歳

・3月1日 望東尼随想 緑旗(京城・緑旗聯盟) 第8巻第3号(特輯・決戦期の思想と文化) 【天皇】

*末尾に「(編輯者御断一本稿は「新女性」のための啓蒙的に書かれたものでありましたが、

本誌に掲載させていただきました)」とある。「新女性」は、1942年8月創刊、興亜文化出版発行、緑旗発売の雑誌。

全集未収録（全集著作目録に見える）

※10月30日 大東亜建設と国語国文学のありかた 日本諸学 第4号（大東亜建設ト諸学ノ在リ方（三））（日本諸学振興委員会編纂、内閣印刷局印刷発行） 【〈文芸学〉的研究】

全集未収録（発行年月日は国立国会図書館デジタルコレクションに拠る。全集著述目録は題を「大東亜建設と国語国文学のありかた」、発行年月を1994年1月と誤る）

※11月1日 みやびの原精神 文藝世紀（編輯人・中河與一） 第5巻第11号 【〈文芸学〉的研究/天皇】

全集1

※11月 撃ちてしやまむを正解せよ◆ 毎日新聞 【歌謡/天皇】

全集未収録（全集著述目録に見える）

※11月30日 山 美夫君志会編『萬葉集叢説』（正文館） 【萬葉集/〈自然〉について】

全集1

※12月 牡丹芳 文学研究（九州大学文学部九州文学会） 第33輯（小牧教授記念号） 【〈自然〉について】 （1943・7・3）全

全集7

◎5月14日、15日 ^{チェン}崔載瑞 海ゆかば 京城日報 第12771号、第12772号

1944年（昭和19） 56歳

○2月 「日本諸学振興委員会常任委員となる」〔全集〕

○8月 「九州帝国大学附属医学専門部講師を兼任」〔全集〕

※4月30日 古文芸と創造的精神 文部省教学局編『日本諸学講演集』第11輯（国語国文学篇）（印刷局印刷発行） 【〈文芸学〉的研究/天皇】

全集1（発行年月日は国立国会図書館デジタルコレクションに拠る。著述目録は発行年月を1943年11月とする）

※10月 石楠花の花◆ 斯道文庫報 【〈自然〉】

※10月30日 古事記大宜都比売の用字の就て 橋本博士還暦記念会編『国語学論集（橋本進吉博士還暦記念）』（岩波書店） 【(古事記の人名表記)】 （1942・11・14）

全集1

1945年（昭和20） 57歳

- ※8月14日 ポツダム宣言受諾
- ※8月15日 「終戦の詔書」をラジオで発表
- ※9月2日 降伏文書調印

※4月 『明治天皇御百首』（至文堂） 【天皇】
全集7

1946年（昭和21） 58歳

- 3月 「九州帝国大学教授を辞す」〔全集〕
- 4月 「大分県日田市に太平学園を開校、太平日本文化研究所所長となる」〔全集〕

◆1940年1月から1945年8月にかけて、全集著述目録によれば、太平洋戦争末期における高木のスタンスを伝えると思われる、以下の文章が発表されているが未調査（全集未収録）。

- 1941年（昭和16）
- ・6月 古典と近代文学 九州帝国大学新聞
 - ・12月 学生に告ぐ 九州帝国大学新聞
- 1942年（昭和17年）
- ・8月 創造心 斯道文庫報
 - ・9月 国語や国字を議するには 西日本新聞
 - ・10月 大東亜の新指標
- 1943年（昭和18）
- ・5月 触発の想念 現代
 - ・10月 征くを送る（短歌） 九州帝国大学新聞
 - ・11月 古典の味ひ方 みどり
 - ・12月 歳末随想 朝日新聞
- 1945年（昭和20）
- ・1月 大学兵の情感 九州帝国大学新聞

（2023年5月5日第1次修訂版 小松靖彦作成）

*追加すべき情報がなおあります。今後調査を進め、逐次修訂を加えます。